

大山記念館^{和館}_{洋館}

(旧 大山 巖別邸)

洋館. 栃木県指定有形文化財



平成7年8月22日指定

栃木県立那須拓陽高等学校

栃木県那須塩原市下永田4丁目3-52 (〒329-2712)

電話 0287(36)1225 FAX0287(36)8027

◇大山 巖

元帥 陸軍大将 従一位大勲位功一級 公爵

天保13年(1842年)10月に鹿児島藩士の家に生まれ、慶応の初め頃から西郷隆盛・大久保利通に従って国事に奔走した。鳥羽伏見の戦・西南の役等に従軍して功をあげた。その間、明治3年以降再三にわたって海外諸国に留学または視察に赴いた。明治18年陸軍大臣、23年陸軍大将、31年元帥となった。

日清戦争では第2軍司令官として、また日露戦争には満州軍司令官として一身をささげて活躍した。大正3年には内大臣を拝命し、さらに国事に励んだが、病には抗し難く、大正5年12月、全国民に惜しまれつつ75歳でその偉大な生涯を終えた。

国はその功績をたたえて国葬とし、最高の礼をつくして手厚く葬った。霊柩は生前からの本人の意志どおりに当地大山家所有地内の指定された所に埋葬された。



大山 巖

◇大山 柏

陸軍少佐 従二位勲三等 文学博士 公爵



大山 柏

明治22年(1889年)6月に大山巖の次男として生まれた。(長男の高は若くして海軍に入り、少尉候補生となって航海訓練中、不幸にして乗艦が爆沈するという厄にあい、艦と運命を共にした。)陸軍士官学校卒業後、大正10年ドイツ駐在武官補佐官となったが、健康を害して昭和3年退官した。同年、慶応大講師となり、傍ら、陸大で戦史の研究をした。昭和18年永年にわたる基礎史前学に関する研究が実を結んで文学博士となった。その年休む間もなく応召して大戦中は室蘭警備隊長をつとめた。昭和20年復員後は慶応大講師を退き、夫人と共に閑静な西那須野別邸に起居し、考古学の研究に、また自衛隊からの依頼による戊辰の役戦史の執筆に没頭し、昭和28年には文化功労章を受けた。

宿痾高じて昭和44年8月、80才をもって不帰の客となる。町をあげてその霊の安かれと深い祈りを捧げた。

◇大山農場

大山巖と西郷^{つぐみち}従道(西郷隆盛の実弟)とは従兄弟の親しい間柄であった。狩猟を好んだ両氏は度々那須野が原を訪れたが、若い頃郷里の鹿児島で鋤を振ったことがあるのでいつしか那須野が原開拓の志を抱くようになり、明治14年には共同で当地の開拓事業に手をつけようとした。そして当時那須野が原の開拓に活動していた那須開墾社に申し入れて同年500haを兩人に分譲するという承諾を得たのである。これが加治屋開墾場で永田、下永田、加治屋の3つに区分されていた。この永田という地名は東京麹町の両氏の居住地永田町からとり、また加治屋は出身地である鹿児島市加治屋町からとったということである。明治15年から那須開墾社の援助協力を得て事務所や畜舎を建て、原野を開墾して植林を手がける一方では、牛・羊等を導入したが、予期したような成果は得られなかった。そこで、2・3年後には入植者を入れて小作経営にするように方針を変えた。明治19年には東北本線が開通し、28年頃から小作者も次第に増加していった。

明治35年に大山は西郷と語りあって将来子孫の時代となって紛議を生ずることがあっては困るということで、創立20年に加治屋開墾場500haを2分割して各個の経営に移すことにした。そして永田区・下永田区のうち250haは大山家の個人農場として発足した。これが大山農場である。



牛と農夫

下って明治 38 年には嘉仁親王（後の大正天皇）が塩原御用邸からご帰京の途次 9 月 25 日に大山農場にお立ち寄りになり、同農場の前庭に記念の松をお手植えになった。またその傍らには大山巖も記念の松を植えた。これが千代の松、巖の松である。

その後、大山家では二ツ室接続地 28ha を買収して農場を拡張し、一方昭和 4 年県立蚕業試験場那須支場開設にあたり敷地 5ha を貸付け、また真綿加工場を建設するなど蚕業の振興にも力をつくした。



当時の牧舎の全景



当時の農場入り口

昭和 20 年敗戦を迎えると、戦後は農地開放・開拓地の提供・財産税の物納などによって大山農場 270 余 ha の大部分を失い、20ha を残すのみとなった。さらに 38 年にはこのうち 14ha の農地・山林を地域農業教育の振興を考慮して本校に貸付け、44 年には快く栃木県の譲渡交渉に応じて、先に本校に貸し付けた 14ha を含めて 17ha の山林・原野・水田・畑ならびに宅地をすべて本校教育のために提供された。かくてこの土地は正式に県有地となったが、70 余年の歴史をもつ大山農場の名称はそのまま受け継いだ。思えば大山巖が 100 年前に茫漠たる那須野が原に込めた開拓の大願が今ここに成就したのである。

◇大山邸

大山巖は深く西那須野の地を愛していたので、明治 35 年大山農場が発足するや、直ちに以前からあった下永田区内の事務所（明治 14 年設置）の近くに、郷里鹿児島風の台風に強い和風建築の別荘を造営した。多忙な公務の間をさいては時折ここに足を運んで心身の休養をとり、付近を散歩して農夫等と談笑し田園の閑静を楽しんだ。その後別荘に接続して、農場で焼いたレンガを使って洋風事務所を建築した。自分の別荘としては将来さらに宏壮なものを建築したいと考えていたが、身边は公務多忙をきわめ、ついに実現の運びに到らずに終わった。なお昭和 20 年、東京の大山邸が戦災によって消失したので、それから数年間は一家をあげてこの別荘に常住した。家族が東京に戻った後も閑静を好む大山 柏博士夫妻はここで生活していたが、昭和 44 年博士の歿後、武子未亡人は永年住み馴れた思い出深いこの地を去って東京に移った。



古い調度品のある邸内の一室



大山邸和館外観



大山邸和館の一室

◇大山記念館

昭和44年17haの大山農場が県有地となるに伴って、別荘の建物一切は大山家から県に寄贈され、本校がこれを管理することになった。本校では大山家の父子2代にわたる功績を讃えてこれを大山記念館と呼ぶことにした。そしてこの由緒ある建物を永久に保存するため、早速県費600余万円を投じて修繕し現状の保全につとめているので、和風・洋風の別荘は、70余年の風雪に耐えてその環境と共に今もなお明治の面影をそのままにとどめている。(59年3月再修理 屋根・壁・床)。

洋館の内部には、建物と共に寄贈された古い調度品を初め、本校の沿革、部活動の研究物を展示し、また和室は生徒の宿泊訓練や礼法学習の場として活用していた。



6,000m²の敷地にレンガ造り189m²の洋館と244m²の和風別荘がある大山邸全景



大山巖の墓



大山墓地参道

洋館平面図

